言語は皮膚だ

ロラン・バルト

(1915年～1980年)

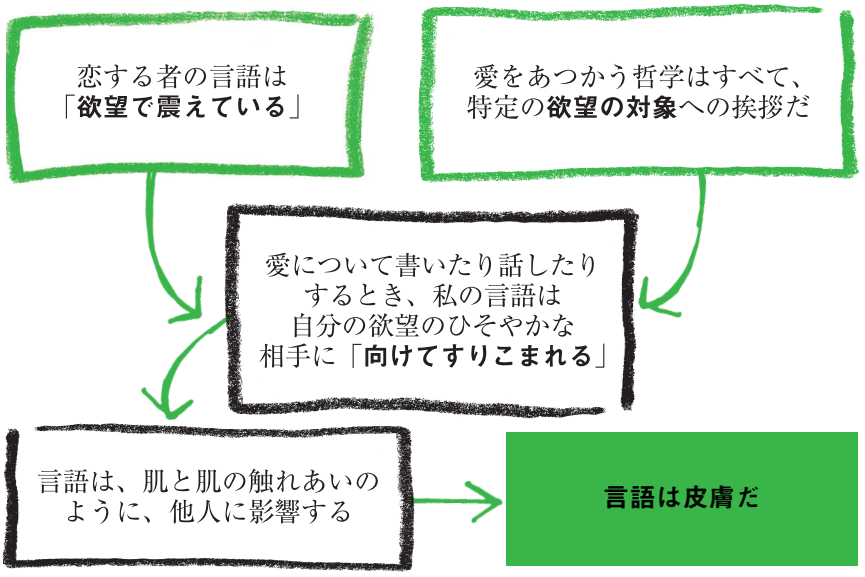
その哲学的背景

部門
言語哲学

手法
記号論

前史
紀元前380年　プラトンの『饗宴』が、はじめから終わりまで愛を主題とした西洋における最初の哲学的議論を提出する。
4世紀ころ　ヒッポの聖アウグスティヌスが、多方面にわたって愛の本性について書く。
1916年　フェルディナン・ド・ソシュールの『一般言語学講義』が、現代の記号学を確立し、あわせてひとつづきの記号としての言語を研究するための土台を築く。
1966年　フランスの精神分析学者ジャック・ラカンが、『エクリ』のなかで、アルキビアデスとソクラテスとアガトンの関係を考察する。

後史
1990年代　ジュリア・クリステヴァが、愛と記号学と精神分析のあいだの関係を探究する。



哲学者にして文芸批評家であったロラン・バルトの著作のなかでも群をぬいて風変わりだが、もっとも一般受けした著作は、『恋愛のディスクール・断章』だ。このタイトルからも推測されるように、この書物は、断章やスナップショットでつづられている点で、どことなくドイツの哲学者ウァルター・ベンヤミンの「一方通行路」と似ている。『恋愛のディスクール・断章』は、哲学書というよりは愛の物語に近い。だがそれは、本当の物語とは無縁な愛の物語だ。登場人物はいないし、ストーリーと呼べるものもない。バルトが「並外れた孤独」と呼ぶ、愛する者についての考察があるだけだ。

まさに冒頭の一節で、バルトは、本書にストーリーが存在しない理由は、愛する者の営む孤独な思想がしばしば矛盾していて、明晰(めいせき)な秩序を欠いた暴発に帰着するものだからだと指摘している。バルトに言わせれば、愛する者である私は、自分が自分に抗(あらが)ってお話を組みたてているのに気づくことさえある。愛する者とは、「ストーリーを失って」しまった者として、そっとしておかれるべき存在なのだ。だから、お話や物語といったスタイルを採る代わり

参照 プラトン 50 ～ 55 頁 ■ ヒッポの聖アウグスティヌス 72 ～ 73 頁 ■ フェルディナン・ド・ソシュール 223 頁 ■ ウァルター・ベンヤミン 258 頁 ■ ジャック・デリダ 308 ～ 13 頁 ■ ジュリア・クリステヴァ 323 頁

> **愛する者はみな狂人だ**
> **ロラン・バルト**

に、バルトは、その著作をさながら矛盾と無秩序に満ちた無数の暴発――そのどれひとつをとっても、読者は「まったくそのとおりだ。見覚えがある……」と思わず叫ばずにはいられないだろう――のエンサイクロペディアに仕立てたのだ。実際、この本に類書などあるはずもない。

愛の言語

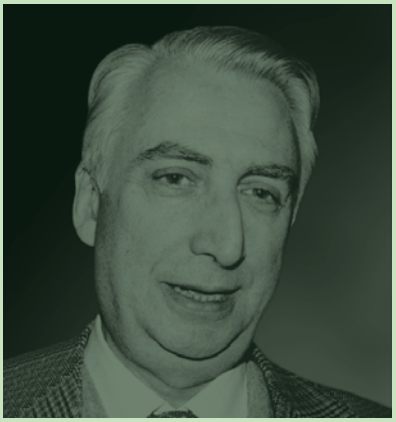
「言語は皮膚だ」とバルトが言いだすのは、こうした文脈においてだ。言語は、少なくとも愛する者の言語は、中立的なスタイルで世界について語るものではない。それは、バルトに言わせれば、「欲望で震えている」。どれほど「自分が他者に向かって自分のことばをすりこむことか。まるで指の代わりにことばがあり、私のことばのてっぺんに指があるかのようだ」とバルトは書いている。冷ややかに、無関心な態度で愛の哲学を書いてみても、その哲学的な冷ややかさのなかには、私の欲望の向かう先である特定の人間へのひそやかな挨拶が埋めこまれているとバルトは言う。仮にこのだれかが「幻影かまだ到来していない存在」であるにしても、だ。

バルトは、こうしたひそやかな挨拶の例をプラトンの対話篇『饗宴』から引いてくる（これが、とりわけ無関心な態度でなされている哲学的議論の文脈からのものではないことを一言断っておくべきだろう）。これは詩人アガトンの家で催された愛を主題とした議論の報告だ。アルキビアデスという名の政治家が、だいぶ夜もふけてから酩酊（めいてい）状態で乱入してきて、アガトンと哲学者ソクラテスに並んで長いすに腰をおろす。そこでアルキビアデスが酔っぱらったままおこなうスピーチは、はじめから終わりまでソクラテスを称えるものだ。だが、じつのところアルキビアデスが欲望している対象はアガトンであり、アルキビアデスのことばがすりこまれる相手は、アガトンなのだ。

だが、私たちが、これ以外の話題について語るさいに用いる言語はどのようなものだろうか。恋する者の言語だけが、隠された欲望で震えあがる皮膚なのだろうか。それとも同じことはほかのタイプの言語にも当てはまるのだろうか。バルトはそれについてはなにも語っていない。それは自分で考えなさいとでも言うかのようだ。■

恋する者の言語は、恋する者によって住みつかれる皮膚のようだとバルトは言う。そのことばは、まるで実際に接触し触れているように、愛される相手を動かす力をもつ――ただし、この力が発揮されるのはこの相手にたいしてだけだ。

ロラン・バルト



バルトは、1915 年にフランスのシェルブールで生まれた。1935 年にパリのソルボンヌに入学し、1939 年に卒業するが、そのときすでにバルトは結核に罹（かか）っており、その後遺症は後々まで本人を悩ますこととなる。この病気ゆえに、教授資格をとるのは難しくなったが、第二次世界大戦中に兵役にとられるのは免れた。戦後、ようやく教授資格を取得したバルトは、フランス、ルーマニア、エジプトで教壇に立った。フランス本国で暮らす生活にもどったのは 1952 年のことで、そこから文筆生活がはじまる。その文章は1冊にまとめられ、1957 年に『神話作用』として出版された。

バルトの名声は 1960 年代をつうじて、フランスのみならず国際的にもどんどん高まり、本国でも海外でも教えるようになった。クリーニング屋のトラックにはねられて 64 歳で亡くなるが、それはのちに首相となるミッテランとランチをとった後のことだった。

主著

1957年 『神話作用』
1973年 『テクストの快楽』
1977年 『恋愛のディスクール・断章』

その哲学的背景

部門
認識論

手法
脱構築（デコンストラクション）

前史
紀元前4世紀　プラトンの『メノン』が、「アポリア」の観念を探究する。
20世紀初頭　チャールズ・サンダーズ・パースとフェルディナン・ド・ソシュールが、それぞれ記号と象徴の研究（記号学）を開始し、これがのちに『グラマトロジーについて』に大きな影響を与える。
1961年　エマニュエル・レヴィナスが、『全体性と無限』を刊行する。この書は、デリダの『エクリチュールと差異』におさめられたレヴィナス論にたいする応答であった。レヴィナスは、後期デリダの倫理にかんする探究において次第にその影響力を増していった。

後史
1992年　イギリスの哲学者サイモン・クリッチリーの『脱構築の倫理』が、デリダの業績の諸相を探究する。

ジャック・デリダは、20世紀の哲学者のなかでもっとも論議の的となった人物のひとりだ。デリダの名は、なによりもまず「脱構築（デコンストラクション）」と結びつけられるが、これは私たちが文字で書かれたテクストの本質をどのように読み理解するかについてのとても複雑でニュアンスに富んだアプローチだ。デリダがそのよく知られた著作『グラマトロジーについて』で述べた「テクストの外部にはなにもない」（フランス語原文からするなら、「テクストの外部はない」とも訳せる）という断定の意味を知りたいなら、デリダの脱構築的アプローチの特徴をもっと詳細にみておく必要がある。哲学書であれ小説であれ、ある本を手にとるとき、私たちは自分の手のなかにあるものがそれなりに自足した全体として理解あるいは解釈できるものだと頭から思っている。仮にそれが哲学書であった場合、私たちはそれがとりわけ体系的かつ論理的に書かれていると期待したくなる。書店に行って、『グラマトロジーについて』のある版を手にとったとしよう。最後まで読み終えたなら、「グラマトロジー」そのものがなんであるのか、この主題についてデリダが主としてどのようなことを考えているのか、それが世界についてなにを教えてくれるのかといったことがわかるものと期待しているだろう。だが、デリダの考えでは、テクストの働きとはそんなものではない。

> 私たちはみな媒介者であり
> 翻訳者だ
> **ジャック・デリダ**

アポリアと差延（さえん）

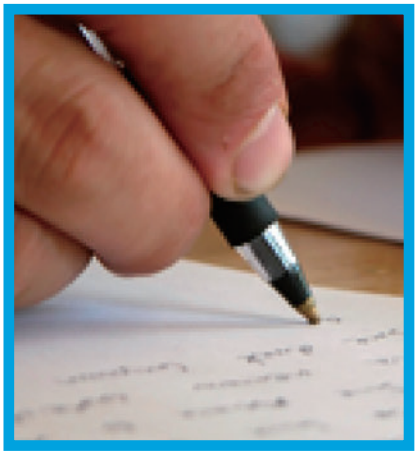
もっとも簡明なテクスト（もちろん『グラマトロジーについて』はそうしたものではない）でさえ、デリダが「アポリア」と呼ぶものに満ちている。「アポリア」という語は、古代ギリシアの語彙（ごい）に由来しているが、もともとの意味は、「矛盾」とか「謎」あるいは「袋小路」をさす。デリダの考えでは、文字で書かれたあらゆるテクストにはそうした断絶や欠落、矛盾が潜んでおり、脱構築（デコンストラクション）というデリダの手法は、こうした謎や袋小路に注意をはらいながらテクストを読みすすめる方法だ。さまざまなテクストに姿をあらわすこうした矛盾を探究するなかで、デリダがめざすのは、テクストとはなんであり、なにをするものかについての私たちの理解の幅を押しひろげ、一見どれほど単純に思われるテクストの背後にさえ複雑なものが潜んでいるのを示すことだ。脱構築とは、隠された逆説や矛盾をあかるみに出しつつテクストを読む手法だ。だが、これは私たちが哲学や文学をどう読むかということだけにかかわる話ではない。デリダのこの手法には、もっと広大な射程がはらまれており、それによって言語と思想、さらには倫理のあいだの関係までもが疑問に付される。

ここで、デリダの語彙からひとつの重要な術語「差延［différance］」を導入することが理解の助けとなるだろう。この語は、一見するとタイプの打ちまちがいのように見えるかもしれない――実際、この語がはじめてフランス語の辞書に登録されたときには、デリダの母親さえもが厳しい顔をして「でもね、デリダ、あなたが綴（つづ）ったとおりには載ってないようね」とデリダに語ったという話がまことしやかに流布（るふ）しているありさまだ。だが実際には、差延は、言語の急所をさし示すべくデリダがみずからつくりだした語だ。

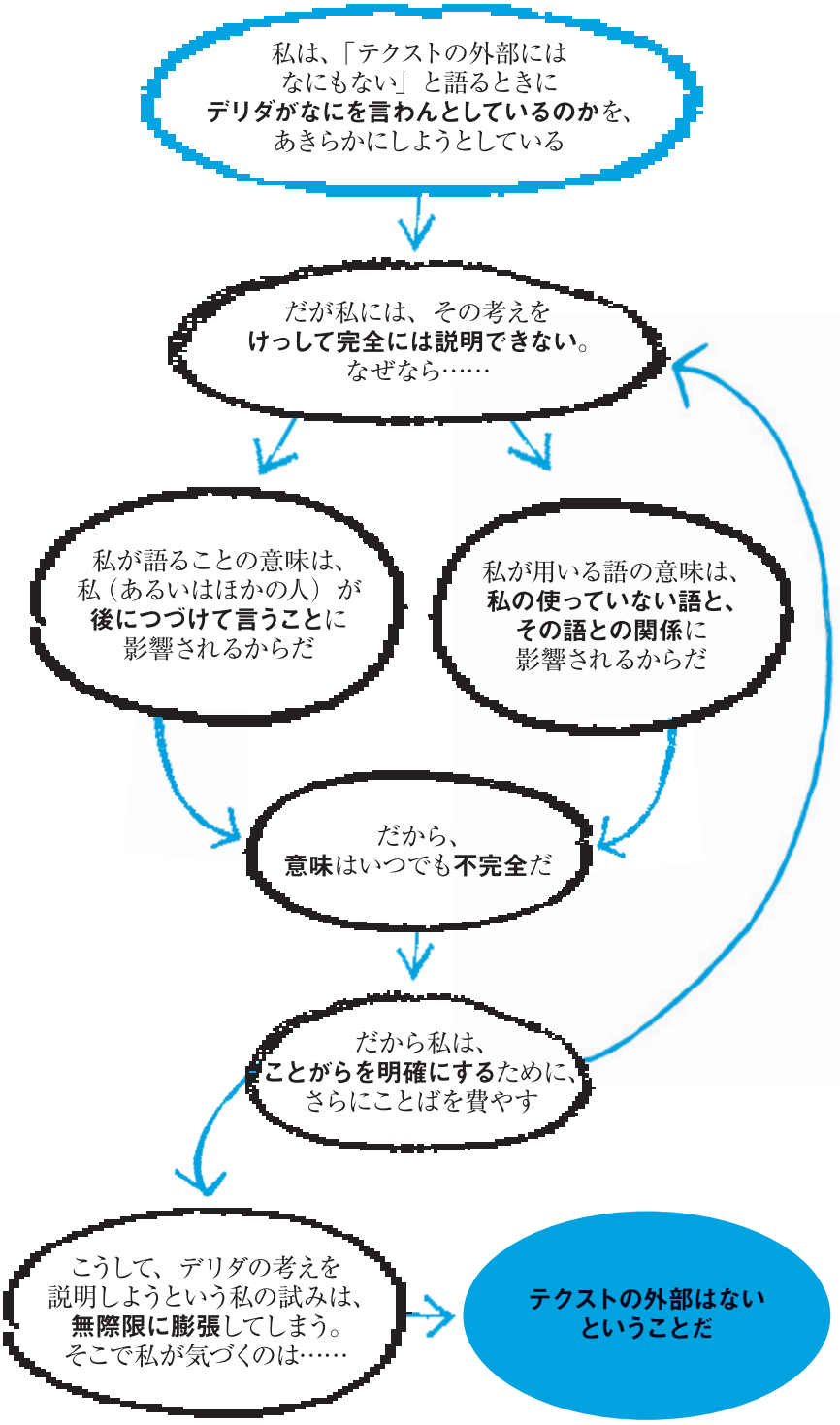
「差延」は、フランス語の「差異［différence］」（「異なること」を意味する）とやはりフランス語の「遅延［différer］」（「遅らせること」を意味する）をかけあわせたものだ。この語がどんなふうに使われるかを理解するには、この「遅らせること」と「異なること」とが現実の場面ではどんなふうに働くか

植字工は、タイプのプレートを印刷前に入念にチェックできる立場にあるが、そこに表明されている観念は、デリダに言わせるなら、どれだけ分析を施しても除去しえないほどの「アポリア」や矛盾に満ちている。

参照 プラトン 50 ～ 55 頁 ■ チャールズ・サンダーズ・パース 205 頁 ■ フェルディナン・ド・ソシュール 223 頁 ■ エマニュエル・レヴィナス 273 頁 ■ ルイ・アルチュセール 338 頁 ■ ルネ・ジラール 338 頁 ■ ミシェル・フーコー 302 ～ 03 頁



私たちの書くことの意味は、デリダの考えでは、つぎになにを書くかによって変わる。ただ文字を書くだけの驚くほど単純な行為でさえ、テクストそのものの内部での意味の遅延につながることがある。

を考察するのが一番だろう。遅らせるほうから見てみよう。「猫……」と私が発言し、ついで「僕の友人が見かけた……」と付けくわえ、さらにあいだを置いて「庭で……黒白のぶちだった……」と発言する場面を想像してもらいたい。私が用いている「猫」という単語の正確な意味は、つぎつぎと情報が付加されるとともに引き延ばされてゆく。もし私が、「猫……」と言ったところでことばを切って、友人にも庭にも言及しなければ、「猫」の意味は異なったものになっていただろう。言いかえるなら、すでに言ったことになにかを付けくわえれば付けくわえるほど、すでに言ったことの意味は修正されてゆく。このようにして意味は、言語において遅らされる。

だが、ここで進行している事態はこれだけではない。デリダの考えでは、「猫」の意味は、私のことばと世界内の実際のものとのあいだの関係のうちに潜んでいるものではありえない。語はその意味を言語体系全体のなかでの位置に応じて受けとる。だから、私が「猫」と言うとき、この語に意味があるのは、語と現実の猫とのあいだになにか不思議な結びつきがあるからでは